

詰みから始める  $D \times D$

神榛 紡

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

テンプレ転生したら兵藤一誠だった。とりあえず特典貰ったけど言い方があいまいだったからかゴミ能力だった。

だが、そこで思い出すのは原作一卷、才能の無い原作一誠ですら赤龍帝を宿すせいでポーン八個を消費したという事実。じゃあ、産廃とはいえ特典能力を三つも持つてる自分はどうなのか。

転生できないのではという詰み状態から始まるD×D。まあ、転生できても一誠じゃない時点で詰んでると言わざるを得ないんだけども。

主人公だからこそ艱難辛苦を乗り越えられるのに、主人公じゃない凡人がそこを補うための特典が戦闘じゃ役立たず確定だから仕方ない。

完全に積んだ状態をひっくり返すための悪あがきが成るか。今後に期待。

目次

プロローグっぽい何か	1
一話の前の幕間	17

## プロローグっぽい何か

ハイスクール D×Dの兵藤一誠に転生と聞いて思ったのは「あ、詰んだ」である。

いや、特典はあるのだが、転生先を知る前に決めさせられたし、そもそも俺は原作を魔王会議だかまでしか知らないのだ。

いや、それしか知らないのにどうして詰んだなんて思うのかとツッコまれるかもしれないが、英雄派だのグレードレッドだのウロボロスだのと化け物染みたつていうか、世界良く滅ばないなってレベルの化け物がゴロゴロしてるような世界だというのは又聞きであるもの聞いてるし、二次創作も多少読んでいる。

ウロボロスドラゴンを名乗る最強幼女が序盤で仲間になるようなご都合主義が起きるような主人公属性は持っていないし、ぶっちゃけ三つある特典も一つを除いて戦闘じゃ役に立たないし、その特典も直接戦闘力が上がるような物でもない。

いや、まあ、それだけならチート皆無の主人公がどうにかできたんだから大丈夫じゃないかとも思うのだが、俺が転生した結果発生する、決定的にどうしようもない問題が一つあるのだ。

悪魔に転生できないという、最悪かつ最凶の問題が。

思い出して欲しい。一誠は赤龍帝の籠手が未覚醒かつ死亡した状態でポーン八個を消費して初めて転生できたという事実を。

その後の活躍からして、赤龍帝だけでなく、一誠本人の潜在的価値も込みでポーン八個と考えても、平凡な自分だけだったならおそらく赤龍帝込みでもポーンの駒が一つ二つは余るだろう。だが、そこに特典であるチートをドンと足せば、多分、赤龍帝の籠手が無くても足りないほどに跳ね上がる。

どうしてそんな事になるかという質問に答えるためにも、チートを公開しよう。

特典は三つ。

万物快食：具体的にはたとえ毒だろうが食べられるように調理できる技能、あるいは能力を所望した結果与えられたスキル。毒でも土でも何でも食べられるようになるらしい。ほら、これならもし狩人×狩人の流星街みたいなところで生活するはめになっても大丈夫だし、まともな食料が手に入らないような世界に行っても大丈夫だろう？

うん。なんで調理のスキルを欲しがったのになんでも食べられるスキルなんだろうな。

万象調整：どんな所でも、どんな環境でも生きていけるように適応する能力を欲しがったらこれになった。まあ、読んで字の如く、どんな環境だろうと快適な状態へと無理矢理調整する能力。ぶっちゃけ、湿度諸々の調整ができる見えないエアコンだと思う。悪くない能力なのだが、この納得できない感じを分かってもらえると嬉しい。

物理無効：戦闘に使えるっぽい唯一の能力。攻撃無効化を要求したのに何故か物理のみに限定された上に使うとこっちの物理攻撃も無効化されるという欠陥しかない能力。これで十分とか言われたが、魔法ある時点で十分じゃない。

上手くオンオフできれば有用だけれども、戦闘の才能が無いとろくに使えない。そして一誠はろくに魔力も無いから魔法攻撃できるのは相手だけという鬼畜仕様に早代わりする。

特典を改めて見るとホント酷い。曲解のせいで俺が負けないのつて物理オンリーの子猫だけじゃね？

唯一便りにできそうなのは赤龍帝の籠手だけだが、それだって倍化という単調な能力であり、譲渡も仲間がいなければ役に立たない。その上倍化自体もかなり簡単に解けるというか、一発ぶっ放して終了とか役に立たない。

しかも悪魔に転生できないから人間のスペックそのままという悪夢であり、バトル物だった以上、原作の敵キャラをどうにかしないと世界終了のお知らせとなりかねない。

アースアはまだ連中の内情をチクるなり、レイナーレにそれじゃ怒りを買うだけだと理解させればどうにかならない事もないだろうが、このまま行くとメインヒロインの強制結婚から紫藤イリナとゼノ

ヴィアの死亡、その後の三大勢力の会談はそれ自体が成るか否か分からなくなる。

焼き鳥は好かないが死ぬ訳じゃないし、何かできる訳でもないから仕方ないとして、イリナとゼノヴィアも人の身で聖剣持ちの神父＋コカビエルに挑めるような戦闘能力は持つてない。白龍皇の完璧超人の戦闘狂なんて瞬殺される未来しか見えない。それ以降は作品がドラゴンボール並のインフレ物と聞いている以上、期待なんてできないだろう。

……二巻目以降全部詰み状態って斬新だな、おい。

龍の力による因果とかを考えると赤龍帝の籠手を目覚めさせて訓練なんてできないし、鍛えはするものの、人間の域を出ないどころか、魔力がほぼゼロ以上、一般人の域からまず出れない。

力が無いなら柔術やら合気が鉄板だが、魔力無しに化け物共もポンポン投げ飛ばせるようなセンスがあれば詰んだなんて話にならないだろう。

「改めて考えると笑えてくるな」

「どうした、イツセー。思い出し笑いか？」

「あー、まあ、そんなとこ。気にするな」

怪訝そうにこちらを覗き込んで来た原作の変態三人組の一人、元浜に軽く手を振って、俺は校舎を見る。

なんとなく原作の友人二人を変態化の道から救い上げてつるんでいるが、原作と違って体を鍛える事に重点を置いている俺と二人の関係はとりあえず一緒にいる程度のものだ。原作通りに駒王学園に進学したが、別の学校に行っていたら、きつと縁はそこで途切れていたと思う。

二年の進級した初日。校舎を見ても赤毛の先輩など見えようはずもないが、それでもたまに原作キャラと思しき人物を見かける事ができる。それは匙らしき男子を連れだした生徒会長であったり、女子生徒に囲まれた木場だったりとその時々だが、ここがアノ世界だと再確認するには十分な話だ。

これからしばらくして、原作が始まる訳だが、レイナーレは来るだ

ろうか。

高校生に探偵みたいな調査員を雇う金は無いが、町外れの廃教会でオカルト染みた噂が出始めたから、誰かが来てるのは間違いないだろう。できれば、原作通りにレイナーレが来てくれている事を祈るだけだ。

「あ、子猫ちゃん発見」

「ん？ あの子猫ちゃんか。こないだはグレモリー先輩を見ていたと思ったら今度は搭城子猫とか、守備範囲広すぎだろ」

「別に守備範囲って訳じゃないんだが、一応あれでも一個しか違わないと擁護はしておこう」

グラウンドを挟んでさらにその先にいるあのロリっこに聞こえているとは思わないが、万一こんな話をしていたと知られた時の反応が怖いので擁護しておく。

にしても、マジでちっこい上に童顔で、小学生と言われても全く違和感の無い彼女にすら発情する原作主人公の守備範囲には驚かされる。

「あれで高校生とかビックリだよな。十六から法律上は結婚出来るけど、普通に高校生と結婚するよりも犯罪臭半端無いぞ」

「ふむ。それこそ合法ロリとかいう奴なんだろう。ロリコン大歓喜だな」

「最近だと、小学生でも非処女とか普通にいるらしいけどな。あんなあどけない顔で非処女だったら割と発狂物じゃないか？」

「いや、だが、彼女が所属しているらしいオカルト研究部は男が木場しかないらしいし、ありえるんじゃないか？」

「一応、男はもう一人いるぞ。どっちかと言えばそっちの方が仲が良かったけどな」

女装男子な吸血鬼を脳裏に思い浮かべつつ、くだらない話をする。この程度でも絵に描いたような女子校だったこの女子生徒からは嫌悪される内容だが、近くには別に誰もいないし、たまには男同士でくだらない話をしてだべらないとやってられない。

去年一年なんか、木場みたいな例外を除けばパンダ状態だったから

な。

「マジかよ。情報源は？」

「グレモリー先輩の同級生から聞いた。まあ、その当人は不登校の引きこもりで、一度も学校来た事ないって話だけだな」

「……部室の場所が不明な事といい、オカルト研究部って、それ自体がなんかオカルトの塊だよな」

「まあ、そこは同意する」

部員がそもそも全員悪魔だしな。生徒会もそうだが、完全無欠のオカルト集団だ。

もうしばらくすれば、堕天使の総督や戦乙女まで集まってくるようになるかもしれない。原作とは全く違う方向に行っているのに同じように集まってきたのなら、この町、あるいはこの学園は特異点と呼んだ方がいいな。

そんな風にふざけても、本当のところは赤龍帝の籠手に宿るドライグの因子が原因だって事くらいは分かっている。それでも、神器を目覚めさせていない今はまだ平和だ。先を憂うよりもそれを甘受すべきだろう。

そんな風に考えていたから、油断していたのかもしれない。

「面白い話をしてるわね」

聞こえた声に、即座に反応して飛び上がり、背後へと振り返った。同時、重要人物がこんな近くへ来るまで気付かなかった事に、冷や汗が頬を伝う。

そこにいたのは、〃騎士〃と〃女王〃を引き連れた赤髪の〃王〃リクス・グレモリー。原作メインヒロインにして、魔王の妹、聞きかじりではないが、破滅だか破壊だかの厨二病そのものな魔力性質を持つ怪物、いや、悪魔。

その姿は余裕たっぷり、優雅であり、今の俺では決して勝てない力を秘めているとは思えないほどに美しい。

斜め後ろに立つ姫島朱乃も、ソーナ・シトリーもそうだが、こういう桁の違う美貌を見ると、人ではないという事に強く納得してしまう。それほどに、美貌を含めた魅力というモノが人間離れしている。

「あー、先輩方の部活を話のネタにした事は謝罪します。ただ、馬鹿にした訳ではない事はご理解いただけると嬉しいのですが」

「あら、別にそんな程度の事で怒るほど狭量ではないわよ」

原作ではなかった、レイナーレが現れる前の接触。イレギュラー過ぎる事態に混乱と困惑を押し殺し、表面上は普通に見えるよう振舞う。見破られているだろうが、それでも建前は重要だ。

建前でごり押しして退散する心積もり。だが、現実はそのような思惑通りに進む訳が無い。

「そんな事より、あなた、オカルトに興味は無い？」

「えっ」

信じたくは無いが、今、俺はオカルト研究部に誘われたらしい。そぐそこで元浜が啞然としているが、それ以上に俺は混乱している。混乱せざるを得ない。

ここで付いていったとして、十中八九悪魔に転生などできないが、それでも悪魔側に取り込まれたと思われるかどうか。おそらく、墮天使側は最初から殺しに来るか、接触しないかの二択になるだろう。

前者ならばまだレイナーレが来る可能性はある。原作でのレイナーレの派遣は、おそらく神器持ちの勧誘を任せられている墮天使が、この町の危険度故に切つて捨てても惜しくない手駒を送ったのだろうと思われるからだ。だからこそ勧誘せずに殺しに掛かるような輩が選ばれてしまった。

誤算は、原作一誠がすでにグレモリーの興味を惹いていた事と、レイナーレが貴重な回復系神器を篡奪するために策を弄ろうしていたことだろう。それによって、一誠は悪魔とつて墮天使相手の戦闘経験を積み、強力な回復系神器を持つアーシアが悪魔陣営へと移籍する結果となった。

もしレイナーレが来るならば、ここで付いていても問題は無い。俺以外にイレギュラーが存在しないという前提だが、レイナーレが来たならば、確実にアーシアも付いてくる。余計な外道神父モドキも付いてくるが、あれは物理専門だったはずだから脅威ではない。

だがもし来なかったら――

「もしもし？ 聞こえてる？」

「ふえなぎやつ！」

舌噛んだ。

突発的なイレギュラーに考え込んでたせいで、目の前にリアス・グレモリーの顔があつて、驚いて距離を取ろうとしたが舌を噛んでしまったせいで転び、思い切り頭から倒れてしまう。

目の前がチカチカするし、口の中は血の味がする上にズキズキと鈍い痛みを発していてかなり辛い。

「あらあら、これは大変ですね。手当てする必要がございますわ」

「……そうね。木場、部室まで彼を運んで手当てしてあげて」

「ひは、はいほうふへふっ！」

大丈夫だとアピールしようとしたら、信じられない速度で近付いてきた木場に抱え上げられた。

お姫様抱っこで。

当然暴れるが、想定以上に木場の力が強く、ビクともしない。こいつでこれだったら塔城子猫はどれだけなのかと戦慄している内に、それこそ人前でそんな速度を出していいのかというスピードで旧校舎へと連れ去られてしまった。

しかも、リアス・グレモリーと姫島朱乃はのんびりと歩いて追いかけるそぶりすら見せなかったせいで、道中目撃されたのは木場にお姫様抱っこされて連れ去られる俺という絵図。悲鳴と腐りきった歓声が轟いたが、木場がまるで興味も向けずに通過した結果、晒された時間短かったのは幸いと言わべきか。

いや、原因に感謝するのは間違ってるだろう。というか、もう原作とか未来の脅威とか関係無しに神器出してこいつのどてっばらに全力ぶちこみたくなった。

やらないけど。というか、悪魔でもないのにドラゴンの因子の脅威に晒されたら間違いなく死ぬ。

「いい加減降ろせ」

「そうだね。僕は舌に塗れるような薬を探してくるよ。塔城さん、

ちよつとここで兵藤君が動かないように抑えててもらえるかな。頭を打ってるから、安静にしとかないと」

「……了解しました。けど、頭を打ったなら、普通は動かさないものだと思います」

「後輩に激しく同意だ。あと、なんで名乗ってもいないのに名前を知ってる」

「部長が言ってたからね。有望な人材を見つけたからって勧誘に行くところだったんだよ」

個人情報保護法って言っても意味ないんだろうな。使い魔使って見張られてます、なんて言ってもただの電波野郎だし、映像なり写真なりで証拠を揃えても捏造扱いかもみ消されるかだろうな。

それにしても、さすが戦車と言うべきか、ソファの上に寝かされた俺の胸に、ちよん、と小さな手が置かれているだけに見えるのだが、まるでビクともしない。額を抑えられると立ち上がれないと言うが、起き上がるのに障害になりそうにもない小さな手が、まるで鋼鉄で出来た拘束具のようだ。

こんなに柔らかいのに、不思議なものである。

「有能ねえ。こんな見た目小学生に押さぐえ——ロリっこに手も足も出ない人間に対する嫌味か？」

「ははは、まさか。搭城さんは戦車だからね。力では僕も負けるさ」  
「戦車とはまた絶妙な例えだな。確かにこの力でタックルでもされたら即病院送りだ」

「私がそんな思慮の足りない行動を取るように見えるのですか？」

「……目を逸らさないでください」

原作を知っていると、原因があるとはいえ、あまり考える事無く行動しているのは否定できないと思う。

クールキャラっぽく見えるけど、戦闘方法とかは完全に脳筋のそれだ。まあ、四巻くらいまでしか読んでないんだけど、武術の一つでも修めていれば、焼き鳥との戦いでもまた違った結果がでたのではないかとも思う。

基本戦車の頑強さに任せて突っ込んでぶん殴ったりぶん投げたり

叩き付けたりだったし、投擲術とついでに召喚術を覚えておけば、移動砲台（物理）として現代戦車のような戦いができたのではないだろうか。ただの鉄球でも雨あられとぶん投げられれば相応に脅威だし、原作イツセーがやったみたいに聖水を仕込んだり、事前に魔術を仕込んだりすれば脅威度は跳ね上がるはず。

この先、自身の中にある猫又の力を受け入れれば、さらに戦闘力は上がるだろう。

「そう考えると残念だよなあ」

「なんで人を憐みの目で見るんですか」

「いや、よく食べるって聞く割に成長しなゴハアツ!？」

「殴りますよ?」

「殴ってから言っても遅いと思うんだが、思いやりとか優しさという言葉を胸と一緒に捨てていや分かった俺が悪かった謝りますからその握りしめて振りあげたこぶしをゆっくりと下してくださいお願いしますさすがにそんな威力で何回も殴られたら死んでしまいます」  
暇なのでごまかしついでにからかったら本気で死にそうだったので即座に謝罪する。押さえつけられてるのでできないが、そうじゃなければ全力で土下座をしそうな勢いの俺に呆れたのか、子猫ちゃんはため息を吐いて離れてくれた。

舌も頭も痛みは引いてきたし、逃げちや駄目だろうか。

「起き上がったらぶん殴ってでも寝かせます」

「それ本末転倒というものじゃないかねえ。むしろそっちのが重症になりそうなんだが」

「塔城さんは手加減も心得てるから大丈夫だよ、たぶん。はい、口内炎用の塗り薬しかなかったけどいいよね」

「ここまで信用に値しない発言も久しぶりだな。直近ではバカ共の覗き辞める宣言くらいって、割と最近か。あと、薬はありがたく受け取っておこう」

腐れイケメンから受け取った薬を適当に噛んだ傷へ塗り込んでおく。さすがにもう逃げる気はない。ゆっくり歩いてきたとしても、そろそろお姫様とその従者が到着する頃合いだから。

「で、二大だか三大だかのお姉さま？　はまだ来ないのか？」

「あら、そんなに待たせたかしら」

「H A H A H A！　マツタクマツテオリマセントモ！」

入り口で出待ちとか少しばかり意地が悪くありませんかね。

クスクスと笑いながら俺が寝かされている正面に座るリアス・グレモリーだが、優雅な動きからは確かに良い所のお嬢さんなんだろうなと想像させるだけの気品がある。さすが公爵家。侯爵家だったか？

それにしても、子猫ちゃんと違ってヤバいな、どこがとは言わないが。

「何か不愉快な事を考えている目ですね」

「いやいや、そんな決めつけで拳向けられたら堪ったもんじゃないんだけどね。ちよつと人体の神秘について考えていただけであって、別に特定の部位を比較する意図はなかくふう……」

「あら、短時間でずいぶん仲良くなったのね」

「……殴られて悶絶するこの様を見てそう思えるなら、眼科か精神科の受診をお勧めしますよ」

「私がこれと仲が良いとか心外です」

さすがに本気で死にそうだから、これ以上のからかいは自重すべきだろう。いやホント、一般人相手にボーリング腹の上に落つこととしたような威力は勘弁してくれないもんかね。これがポカポカと見た目相応の威力だったらとても幸せなんだが。

まあ、いいや。こっからはちゃんと真面目にやろう。

「それで、リアス・グレモリー先輩はただの一般人男子生徒の俺に対して何を聞きたいんですか？」

「そうねえ。今は子猫の事を好きなのか聞きたいわね」

「なっ、何を——」

「そうですね。子供の頃に家で買ったハムスター並には好きですよ？」

慌てた上にこっちの返答で何とも言えない微妙な表情になった子猫ちゃんが可愛い。

リアス・グレモリーも子猫ちゃんを慈愛に満ちた目で見た後、こち

らに向けてウィンクを飛ばしてくる。

褒めても何も出ないぞ。

「あら、その程度の好きじゃ子猫は上げれないわね」

「上げる気なんてこれっぽっちも無いのに良く言いますよ。手放す気は無いって顔に書いてますよ?」

「いやだわ。子猫が自分で見つけた相手なら、私は別に邪魔する気はないわよ」

「最初のハードルからすでに高すぎる気もしますけどね」

「その程度のハードルも越えられずに「リアス」……ごめんなさい。思ったより楽しくて脱線しちゃったわね」

「いえ、暇なんで別に構いませんよ」

脱線どころか初めから線路から外れていた気がしなくもないが、基本無表情な子猫ちゃんの慌てた顔が見ただけで一部には自慢できるし十分役得だろう。

代わりに当人からすごい威圧がビシバシ来てるけど。

あえて言おう。ご褒美であると。

「それで本題なんだけどね。さっきも言ったけど、オカルト部に入らない?」

「それは部員的な意味ですか?」

「悪魔的な意味でもあるわよ?」

ちよつと踏み込んだら笑顔でサラツと返された。怖い。

他の皆も特に反応は見せなかったが、空気が固まるのが分かる。まあ、少なくとも現状で一切自分たちの領域に接触を持っていなかったはずの相手が、自分たちの事についてしつかりとした知識を持っているなんて状況になれば、誰でも警戒するだろう。

むしろ、ニコニコと笑顔で警戒のけの字も見せないリアス・グレモリーが異常なのだ。

「どうして私を選ぶんですか? 自分で言うのもなんですが、取り立てて目立つところもなく、今の言動もかなり怪しかったと思うんですけど」

「私が欲しいと思ったからよ。後付けの理由ならいくらでも上げれ

るけど、そんなものは無粋だわ。私が欲しいと思った。それだけあれば理由としては十分よ」

「一般人のはずなのに、オカルトに類する知識を持っている異端者だというのに、ですか？」

「……その一般人という主張は口癖なのですか？」

本来、正史では一誠を認識はしていても、死ぬ時にリアスを召喚するまではさほど気にはしていなかったというのに、今生、騒ぎを起こしている訳でもないのに勧誘に来た。その疑問を晴らすためにも質問を重ねたところ、反応したのは子猫ちゃんだった。

その目は、胡乱なモノを見るように眇められており、唇も心なしか尖っているようにも見えた。

「口癖って訳でもないけど、学内の有名人に囲まれて君が欲しいなんて言われればね。どうして自分みたいな普通な奴がとは思うよ。さながら、血統書付きの高級な犬の群れに囲まれて、しかも群れのリーダーに求愛された雑種犬のような気分だ」

「求愛されたわけじゃないですけどね」

「例えばよ、例え。で、子猫ちゃんはどうも俺が一般人を主張する事に異があるようだけど、どういう事かな」

「このひと月ほど、先輩を監視していました」

「ストーカー宣言「茶化さないでください」イエツサー」

ふざけるのをやめたら俺じゃないと主張したいが、きつとそうしたらまた砲弾のようなパンチが飛んで来るんだらう事は予測できたので自重した。せざるを得なかった。

何か食べ物を提供すれば許してもらえらるだろうか。

「許しませんよ？」

「ナチュラルに心読むのやめてもらえませんかねえ」

「とにかく、このひと月先輩を監視していた訳ですが、毎日一時間以上数十キロを走り、スポーツではない実戦を想定した古武術の鍛錬に励み、修行僧もかくやというほどの長い瞑想をするような方を一般人とは呼びません。普通の人は、必要もないのに軍人でもハードな訓練を己に課したりはしません」

「いやあ、知っちゃったらどうにもじつとしていられなくてね。せめて逃げるくらいでできるようになったらいいくらいだけど、才能も無かったみたいで、体力付いたくらいだよ？ 魔力も感じられないしねえ」

いや、ホントに魔力のまの字も感じられなくて悲しみすら感じないレベル。原作一誠が悪魔化してようやく豆粒レベルだった事を考えると、俺も同程度だと思われる。

仙術があるという話は聞いているので、気とかチャクラ的な物がなにか頑張つて探したけれど、才能ないのかよく分からなかった。少なくとも独学は無理っぽいと判断して、現在は完全に肉体の強化一択となっている。

それだって才能があるとはお世辞にも言えない辺り、主人公の体なのに悲しすぎる。

原作だって素人パンチだったし、鍛えてる分俺のがマシなんだよな。

「遠い目してるところ悪いんだけど、参考までにどこで知ったのか教えてもらってもいいかしら」

「ん、ああ、すみません。いや、幼馴染のお父さんが教会の人だっただけです。今はもう引越してどこにいるかも知らないんですけど、子供の頃に書齋に忍び込んだことがあって、それで色々、ですね」

「そういうえば、昔はこの地にも教会の人間が駐留していたって聞いた事があるわね。駐留していた神父の子供と偶然仲良くなった、って感じかしら」

「偶然ってというか、お隣さんだったんで、同じ年の子供がいたから必然的になって感じですね。それで神父のお父さんの武勇伝——当時は作り話だと思ってたんですけど——まあ、そんな話を聞いたりもしてて、中一の時に色々調べたんですよ。細かいところは省きますけど、それで実在を確信して、それまでは趣味だった武術鍛錬を本格的にするようになったんです。最初は漫画見て古武術カッケーなんて思って始めた事だったんですけどね」

「……君は教会の人間って事かな」

「だったらこの学園に入学したりしないよ。もし教会の人間だったとして、敵地に裸で突っ込む奴がどこにいるんだ。フィクションの世界でだって、そんな事をする奴はいないだろ」

「そもそも、他勢力に所属していないと判断したからこそ、声を掛けてきたのだろうに。」

「こちらとしても、元より付くなら悪魔側で、リアス・グレモリーの配下が最善だと思っている。今代の魔王の内、ルシファーかレヴィアタンに伝手を持てるのは今のこの学園でとても大きなメリットだし、人の身で龍が引き寄せる災厄に立ち向かえるほど、俺のスペックは高くないのだ。」

「生き残るためには悪魔に転生するのが現状における最善手なのだが、十中八九できないのが悲しい。」

「それじゃあ、私の下僕悪魔になつてくれるって事でいいのかしら」  
「俺としてはそれでいいと思っていますよ。駒が足りるなら、倫理道徳に反しない限り忠誠を誓っても構わないと思っています」

「……大した自信があるのね」  
「あらあらと朱乃さんが微笑んだり、子猫ちゃんがジトツとした目でこちらを見るが、それでも足りない事は確定と言っても良いだろう。使えない転生特典でというのが何とも言えないところだが、事実なのだから仕方がない。」

「赤龍帝の籠手が無ければ転生できるだろうが、その場合も武力的な意味で詰んでる気がする。」

「……ここまで言つて赤龍帝の籠手が無かつたら笑えるな。自殺する程度には。」

「そこまで言うなら、今すぐ試させてもらっても構わないわよね」  
「いいですよー」

「……自信満々ですね」  
「違います。これは投げやりつて言うんです。」

訂正したいところだけど、リアス・グレモリーが出した駒に目を奪われる。彼女がテーブルに並べたのは騎士一つ、僧侶一つ、戦車一つ、それからポーンが八つ。

? 変異の駒《ミューテーション・ピース》は無いようだ。もしかしたら見た目では分からないのかもしれないが、リアス・グレモリーは僧侶の駒が変異の駒だったはずだ。だからこそ、他の駒は違うと分かる。

「普通の駒で転生できればいいんですけどね」

「確かに、生憎と変異の駒はないわ。けど、最悪を考えても、ポーンを全て消費しても転生させられない人間なんてそうはいないでしょう」

「それでもありませんよ。かの有名な二大龍の神滅具を持っていて、それを宿すのに相応しい潜在能力を持っていれば、ただのポーン八個じゃ足りないでしょう。或いは、死に掛けるなり、死んでしまふなりすれば別かもしれませんが、そんな事はそうそう起きないでしょうね」

「あなたはそれと同等の才能を持っている、と?」

「ははは、まさか。ただ、今代の白龍公が歴代でも最高峰の怪物だった噂は以前小耳にはさみましたがね。噂通りなら、魔王級の悪魔でもそうやすやすとは転生させられない代表みたいなものじゃないですか?」

原作を見る限りの白龍公が歴代最強の白龍公であるならば、俺は原作の一誠にも負けず劣らずの色物粋だ。

いや、悪魔に転生できない分、俺の方が弱いんじゃないか。そう考えたらなんか悲しくなってきた。

「……まあ、いいわ。これからあなたを悪魔に転生させるけど、転生してしまえば、もう元には戻れないし、デメリットもたくさんある。その辺りを理解して、納得もしているわよね」

「そのデメリットを呑み込んででも、転生できるなら是非したいところですから。転生できたなら、使用した駒に相応しいだけの戦果は上げるつもりですよ」

「そう。じゃあ、始めるわよ」

そう言っただけでリアス・グレモリーが手に取ったのはポーンの駒。まあ、生意気な事を言ってる奴相手に最弱の駒を使う事で高すぎるプラ

イドを折ろうというのだろうが、残念な事にプライドが高くって言うてるんじゃないかって、くっ付いてるゴミ能力の容量的に無理って話なんだよな。

ていうか、これで転生できちゃったらますます詰んでるから。赤龍帝無しって事になるから。

「我、リアス・グレモリーの名において命ずる。汝、兵藤 一誠よ。今この時、我の下僕となるため、その身を変じ、悪魔となれ。汝、我が『兵士』として、新たなる生に歓喜せよ！」

「……」

「……」

「……何も起きませんね」

静かな部室内に、子猫ちやんの声がポツリと響く。

これで一縷の望みも絶たれた訳だが、三つの特典のせいとか、赤龍帝を持っていてなおかつ死にかけていないからか、全くうれしくない事に、嫌な予想がバツチり当たってくれたという事なのだろう。

オカ研メンバーも、転生できないなんて考えていなかったのだろう、驚いた顔でこちらを凝視している。

「待って、今はポーン一つ分しか使ってなかったし、他の駒なら転生できるかもしれないわ。まだ可能性は残ってるもの」

「ああ、そうなんですか。なら早く終わらせてくれると助かります。なんか塔城さんに殴られたお腹がズキズキ痛くて、保健室行きたいんで」

「……子猫？」

「知りません。人をか……先……が………す」

あつれー。お腹の痛みを意識したら、なんか急に意識が遠のいてくんだが。

………まさか、一卷始まる前にデッドエンドですか？

ていうか、ホントに意識……が………

## 一話の前の幕間

目が覚めたら俺を転生させた神様が大笑してました。速攻全力で殴りかかったけど逆にぶっ飛ばされた上に大岩で潰されました。

解せぬ。

「いやあ、君ホント面白いなあ。白音ちゃんに殴られて内臓破裂とか、転生者の死因としては初めてなんじゃないかな？」

「全く持ってうれしくない史上初ですね」

原作開始前に死ぬって、主人公に転生しておいてマジでありえないだろ。さすがに次は無いだろうし、せっかくの第二の人生が、詰み気味だったとはいえ、約十六年で終了とか悲しすぎるだろう。

しかも神に大笑されるオプシオン付き。泣ける。

「はっはっは。そう拗ねるものでもないよ？ 一応、これで悪魔には転生できる訳だしねえ」

「これで拗ねない奴はいない……は？」

「あー、その分だと気付いてなかったのかあ。気付いててやったのかと思ってたんだけどねえ」

やったって何の事、いや、死んだ事以外ないか。つっても、普通のタイミングでこんな死に方するとか普通は思わないだろう。

誰だって、無意味に死んだりとかしたくないものだ。

「それならどうして物理無効の特典を使わなかったのかな？ 使えば死ぬことなんて無かったと思うけど？」

「そんな事したら確実に疑われるだろう。悪魔になれなくても魔王へのコネを繋ぐためにお世話になる予定だったというのに、そこで使ったら神器だと言い張って誤魔化すしかなくなる。そうなったら赤龍帝の籠手が使えなくなるだろうが」

珍しい神器保有者というだけで狙われる確率大UPなのに、赤龍帝の籠手とダブルとか、世界が敵に回ってしまう。

どこか一勢力に狙われるだけでもヤバいというのに、そんな事になればマヴラブやR―Typeよりはずいぶんとマシだろうが、それで

も型月世界で封印指定を受ける程度には絶望的な展開になる事は想像に難くない。

何回やり直そうとも死ぬ自身があるぞ。

「へえ。思っていたよりずっと考えてたんだねえ。感心し「そしてなにより！」」

「子猫ちゃんに蔑んで貰えるうえに殴ってもらえるなんてご褒美、防ぐなんてとんでもないだろう！」

「感心して損したよ。割と本気で引いた」

「それで、悪魔に転生できるってどういう事？ 第二の人生THE ENDだと思ってたんだけど」

なんでジエンドだけ無駄に発音いいのさと神はぼやくが、そんなもの、その場のノリと勢いに決まってるだろう。こういうものは考えるだけ無駄、いや、負けなのだ。

馬鹿になった方が人生楽しいと三馬鹿の二人から学んだのである。

あいつら、せっかくあの異常極まりないおっぱい紙芝居という洗脳を阻止した上に、出会ってからはそういった言動を隠すという事を教えたのに、女子ばかりの教室でいきなり猥談始めることが未だにあるからな。

常識持つて接していると胃に穴が開く。

「変なところで苦労してるね。話戻すけど、悪魔に転生できるのは悪魔の駒の性質が問題なんだよ。この辺りは神器や特典がどういう物かも関係してくるんだけどね。分かりやすく実感してもらおうか。兵藤一誠に生まれて君は赤龍帝の籠手——ああ、あるのかどうか気にしてたけど、ちゃんとあるから安心していいよ——を手に入れた訳だけど、試しに今出そうとしてみなよ」

「その言い方をするという事は、出せないって事じゃ」

「うん。そうなんだけどさ、こういうのは口で言うより体感した方が早いでしょう？」

神の言葉に納得して、原作みたいに好きな作品の必殺技を真似ようとしたが、早速大きな問題が発覚した。

「すみません、岩退かしてくれないとどうしようもないんですけど」

「ふむ。退かしてまた殴りかかってきても嫌だから、実感してもらうのは諦めよう」

「いや、そこは退かしてくれるところでしょ！」

「……逆にこう考えるんだよ。退かさなくてもいいや、と」

くだらないネタを使ってニッコリ笑うが俺は騙されない。これは完全に退かすのが面倒だというだけだ。

だって一瞬すごい面倒くさそうな顔したもの。

「さて、神器と特典の違いだけど、分かりやすく言うと、魂の中に組み込まれているか、魂の外にくっ付けられているか、という事になるね。魂が一つの絵画だとすると、絵の中に直接描き込んで一つの絵画としてしまうのが特典で、別の絵を横に継ぎ足してしまうのが神器になる。例えば、椅子に座った人の絵があつたとして、膝の上に物が乗っているように書き足したり、背景に付けたしを試してみたりするのが特典になるんだけど、神器は全く関係の無い絵を他所から持ってきて、糊付けするようにくっ付けてしまうんだよ」

「んー。つまり、ゲームに例えると特典はステータスUPさせる種とかスキル覚える指南書みたいな物で、神器は装備品みたいな物か？」

「その表現に付け加えるなら呪われた装備品と言うべきだね。まあ、今の君は転生の処理には入っていない訳だけど、本来なら世界から魂を拾い上げる時点で転生の処理に入るからね。世界の内側で生まれた理に則ったアイテムである神器は、外側であるこの場には持ち込めないという訳だ」

「……その条件だと、神器は次の所有者に移らないか？」

「ちゃんど？留《とど》めているから大丈夫だよ。で、話を戻すけど、悪魔の駒は特典や神器といった魂に付随するものや魔力や身体能力、情報処理能力みたいな肉体に依存する能力の潜在値も込みで必要数が決まるから、その数値を跳ね上げている特典が付随した魂をここに持ってきて、神器を肉体に留めておけば原作に近しい処理となって、ポーン八個消費での悪魔転生が成立する訳だね。まあ、魂戻した時点で一個か二個くらい駒が変異するかもしれないけど、誤差だろうさ」

「駒って後から変異するものなのか」

「普通はしないけど、例外はどこにでもあるものだよ。駒の消費量なんて、あくまで目安でしかないからね。たまにはそれでは足りないくらいの成長をする者も出てくるものだよ。それに僕が見た限り、変異というよりあれは進化と言うべきだ。レベルが上がって進化するみたいだね。ポケモンとか分かりやすいかな」

「なんかというか、出てきた例えが有名過ぎてミーハーな感じがする。ただ、今の説明だとどちらかというところとデジモンの方が近いんじゃないだろうか。いや、究極進化とか力使い果たして退化とかされても困るけど。」

「それにしても、さすが神様特典。あんな使い道のない代物でも駒が変異する程容量食うのか。」

「いや、内容は君が決めたんだよ？ それに使い道が無いのは君の考えが足りないからさ」

「内容決めたって、どうにも使いにくい能力にすり替わっているように思えるんだが？」

「いやいや、僕は君の無理難題にとても苦労して考えたんだよ。君の要望だと人の身では色々無理が出てしまうからね。人の体に無理のないように、それでいて君の願いに沿うようにする最善があの能力なんだよ」

「ちなみに、言ったとおりにしたらどうなってたんだ？」

「あの世界に限った話になるけれど、まず、一つ目の願いは問題ないね。これは情報を頭に叩き込むだけだし、脳機能を少し弄って変質させれば外見には現れない。ただし、君、なんでもなんて言われると溶岩とかそういう通常の調理器具では調理できない物が出てくる訳だ。そんな片手落ちにならざるを得ない特典を、僕が許すと思ったのかい？」

「自己満足ののために変えたのかよ。やっぱ殴りたいこの神様」

「まあ、理由の一つでしかないけどね。僕なりの親切心なんかもあるさ。で、二つ目だけど、環境に適應する体となったら、一年くらいで人じゃなくなるよ。その世界の法則に合わせる必要があるからね。」

環境への適応だとしても表面から変わらざるを得なくなる。いや、悪魔や天使、一部の龍の良いとこどりをした肉体を作ればできないはない。ただし、胎児の時点で母体の腹を破いてめでたく死への一直線コースに乗っただろう」

「その辺、神様なのに上手い事どうにかできなかつたのか」

「神様だつて万能じゃないさ。世界を創ればどうしても陰と陽、善と悪を発生させる必要があるし、君の世界の柱として創られた内在の神もすでに壊れた。世界の中に在るために己の容量を制限したせいだね。君を主人公君の体に入れたのだから、色々と問題が起きた結果の緊急避難措置、つまりは神様でもどうしようもなかつた結果さ」

皮肉気に笑う神様だが、ちよつとその笑みは疲れているようにも、悲しんでいるようにも見える。

神様でもどうしようもないという事態が気になりはするが、そんな表情を見てしまうと、神様なのにとという言葉が無責任で最低な言葉だつたと突き付けられて、今更自己嫌悪が襲ってきた。

「別に君が責任を感じる事は無いよ。僕らの失態のリカバリーを押し付けてしまったのだからね。そんな事よりも、三つ目の特典の話だけどき、君、物理つてどこまでが物理だと思う?」

「そりゃ、素手で殴つたり剣で切つたり銃で撃つたり?」

「魔術や超能力は物理ではない、と。そんなものは君たち人間の考えた勝手な線引きだよ。そも、物理つていうのは世界内に存在する要素に当てはまる法則だ。魔術や超能力が物理じゃないとなると、似たような理屈で光なんかも物理から外れてしまう。物理以外つていうのは、言葉により精神への打撃とか、キスによる思考停止とか、そんな程度のもものになってしまふんだよ。物理無効を超えようとするなら、僕のいるこういう世界の外側の物質以前の存在を使うしかない。或いは僕みたいな法則を決める側であるとかだね。だから戦闘時は常にオンにしておく事をお勧めするよ。君も攻撃できない詰み状態になるけど、逆に言えば、相手も君をどうにもできないで詰むんだから、生き残るならそれが最善だ」

「それで全部解決するんならそうするけど、そうじゃないだろ」

「まあ、多少なりとも原作を知っているなら分かるだろうけど、アシアちゃんを助けるのも難しくなるし、部長ちゃんの結婚も止められないだろうね。他にも色々、うん、最悪人類滅亡くらいはあるかな」  
「……想像以上にヘビーだった。身内だけで終わらないのかよ」

「エロ入っているとどうかエロ中心とはいえ、ギャグがあるうともバトルアクション物だよ？ 相応にエスカレートして世界の危機くらいはテンプレだろうさ。まあ、あくまで最悪の話だよ。もしかしたら他の誰かが頑張っただうにかなるかもしれないだろう？」

そんな誰かが頑張っただうにかなるなら、主人公なんていらなくなるだろ。というか、その誰かが主人公になるだろう。つまり、やっぱり主人公の居場所に立っている俺がどうにかしないとマイナス方向へ不確定って事だ。

とんでもない話だな。せめて脇役なら適当に傍観もできたのに、否応なく全力で当たらないと死ぬかそれより酷い事になるって分かって、それでも傍観選べるほど神経は太くない。

俺を大切だと思ってくれているあんな良い家族だっているんだから、自分だけ生き残れば良いなんて事はできないだろう。

「そうだね。そうやって押し付けられた責任でも背負えてしまうからこそ、僕は君を選んだ訳だ。悲劇を知っているのに無視できない君のその資質は貴重だよ。だからこそ、僕は君を信じる。是非とも世界を救ってくれよ。君ならそれができるのだから」

「一般人に向ける言葉じゃないな。いや、転生なんてしてる時点で一般人とは言えないか」

「君のような一般人がいるものかよ。ああ、そろそろ時間だね。君が一誠に戻る前にアドバイスをしてあげよう。——フェニックス戦は死ぬ気で頑張ったまえ。彼が勝てば君は晴れて追放、はぐれとして逃亡生活が始まるよ」

ちよつと期待した俺に謝れ。いや確かにそんな事になるなら死力を尽くしてどうにかするけど、もうちよつとこう何かあるだろ。能力の生かし方とか実はこうするとすごい事ができるとか。

全力で睨んだらやれやれって顔で嘆息しやがった。

「少しは自分の頭で考えたまえよ。——ふむ。もう行ったか。そういえば、アーシアちゃんが駒王町に行くように運命を調整したのを伝え忘れたな。まあ、なるようになるだろうさ。頑張りたまえ、未来の英雄君」